



小林種苗の研究農場にあるシンボルツリーのようなシュロの木

くなくて、私は医者志望でした」との答。「私は長男ですが、弟がいるので、種苗会社は弟が継げばよいと思っていました」。

背景には母方の祖父が医者で、その息子たち（小林さんの叔父）も皆医者だったことがある。「しかも祖父は医者から政治家になった人でしたから、母方の親族は、なるなら医者、でなければ政治家、それでもダメならタネヤになれ、という感じでした」。しかし医者になることを期待する周囲からの重圧は大きく、また小林さん自身も血や病院が苦手なことに気づき、医者への道を断念する。「だからと言って政治家になる器量もないわけです。結局、一般的な学部に進み、企業に勤務する道を選びました。当時は家業を継ぐことはまったく考えていませんでした」。

入学したのは慶應大学だ。時は1980年代前半で、日本経済が、後のバブルに向けて上昇し始めた頃だった。大学生による起業やイベントが注目され、女子大生ブームが起こっていた。小林さんはその渦中にあって、仲間



研究農場は7ヘクタールの広さ。農場としては珍しく、住宅地の中にある

たちと、イベントやツアーなどの学生ビジネスを手がけ、かなりの収益を上げた。

就職活動も順調に進み、小林さんは大手広告代理店に内定。しかし社会人生活が始まってすぐ、父が倒れたという連絡が入り、小林さんは加古川に戻り、家業に入る。

予想もしなかった形での事業承継だったが、やがて小林さんは小林種苗を大きく改革していく。特に大きいのは次の二つの点だろう。

一つは以前から関心の強かった海外に目を向けたことだ。「小学生の頃、大阪万博があり、会場が近くなのでよく通った頃から海外に関心を持ち、それは基本的に今も変わりません。20代後半の頃、種苗業に携わる中で、このままでは国内採種地が大幅に減少すると思いました。そこで、それまでまったく実績のなかった海外での種子生産に着手、海外生産比率を上げていき、現在では海外生産が96%を占めます」。

平成17年（2005）から3年間ほどは、自ら一家で米国に移り住み、米国現地法人の設立などを手がけた。

もう一つは、平成21年（2009）に社長になってから従業員への感謝を土台にした経営に変えていったことだ。「ビジネスではよく、お客様満足（CS）の重要性が強調されますが、小林種苗では従業員満足（ES）に徹するようにしました。売上高が上がるのも、利益が増えるのも、私が社長でいられるのも、みな従業員のおかげだと考えています」。従業員がこの会社で働くことに満